

村田四郎研究

—神学部をめざした前半生—

岡 部 一 興

はじめに

ここで扱う村田四郎という人物は、明治学院が生み出した人物で、神学者であり、牧師であり、教育者でもあった。村田四郎という人間に言及する時、先行研究に目を向けるのは当然のことである。村田自身を扱った本格的な伝記や評伝はない。村田自身が書いた30頁ほどの「回顧五十年」⁽¹⁾という自伝がある。他には、加山久夫「ウルからカナンへ 村田四郎—神学者・教育者・牧師として—」⁽²⁾という評伝がある。また村田は第一級の説教者という評判がある。彼の代表的な説教を集めた『村田四郎 日本の説教Ⅱ』⁽³⁾というものがあり、その中で加藤常昭が「解説」を書いている。さらに、筆者が「牧会者のポートレート—村田四郎」⁽⁴⁾という小伝を書いた。これらの先行研究を踏まえながら新たな視点で追求するのがこの研究が目指すものである。

加山が書いた「村田四郎」は、「明治学院人物列伝研究会」を現在東北学院大学学長である大西晴樹が立ち上げ、この研究会で注目すべき人物を取り上げて発表した。その発表した人物を『明治学院人物列伝—近代日本のもう一つの道』（新教出版社、1998）という書物に収めて出版した。日本の近代化は「和魂洋才」という言葉に現れているように西洋文化受容にあたり、その根本精神とは切り離された形で知識、技術のみを摂取して近代社会を推し進めた感があった。この書は、そうした視点と

は一線を画し、西洋文化の根本精神の一つであるキリスト教による教育を建学の精神に掲げて、教育を展開した明治学院の人物像に焦点を当てることによって、近代日本の特徴を逆から照らし出し、一つの精神的系譜を辿ろうとして書き上げたのがこの書である。総じて29名の人物を取りあげ、その中の一人が村田四郎であった。加山のまとめた「村田四郎」は、読みやすい文章でまとめられているが、その叙述で使われた資料は、『原始キリスト教研究・村田四郎博士五十年記念論文集』（創文社、1962年）に収められた村田の自伝「回顧五十年」、またこの書には、桑田秀延「人及び学者としての村田四郎氏」、日下一「明治学院と村田四郎」、高谷道男「明治学院時代と指路教会時代の村田先生」が収められているものを中心としたもので、14頁ほどの短いもので物足りなさを感じる。

また加藤常昭が編纂した『村田四郎』は、村田の代表的な説教を集めたものに解説を加えたもので、村田の説教の特徴をよく捉えているが、村田の全体像に迫ったものではなく、説教を中心とした解説に終わっている。以上の点から村田の本格的な評伝は、未だ現れてはいない。そうした点を考えると、村田の全体像を考察することは極めて重要なことである。本稿では、村田の全体像に迫るにはあらゆる角度から見た資料の収集が重要なキーポイントとなる。まず、村田が残した書籍を丹念に追跡すること、第二に上記の先行研究では取り扱うことのなかった資料を使用することになる。その資料は、日本基督教会では『福音新報』という機関紙を1891（明治24）年から日本基督教団が成立し、1942（昭和17）年まで発行しているが、そこに出てくる村田に関する記事、戦後は『キリスト新聞』や『教団新報』の記事を探索する。また日本基督教会時代の大会資料、中会資料に当たることにしている。さらに未発表の彼の日記、研究ノートなどにも当たることとする。ただ残念なことであるが、村田に関係する手紙類が殆ど残されていないことである。その他のこと

では、村田を知る人たちからの聞き取りも入れていきたいと考える。

村田四郎という人物を研究する場合、一般的には二通りの考え方がある。一つは伝記、もう一つは評伝である。広辞苑には、前者は個人の一生の事績を中心として記録したものを意味し、後者は評論をまじえた伝記と記されている。ある人物を描く場合、その人物が何を考えどう生きたのか、どのような生涯を送ったのかということを捉えることになるが、そこで重要なことは、人間が歴史を動かす側面があるのではないかと思われる。その人間がどのように生きたのかを生き生きとよみがえらせることが問われている。

この村田四郎研究では、広く村田に関係する資料を探索しながら個人の事績を忠実に追い求めると同時に、彼の生きざまをリアルに描くことを志向したい。この種の研究をする時に心得ておくことは、一人の人間を追いかけるときに人間讃美に陥らないようにしなければならないことがポイントとなる。なぜならば、人間讃美になると真の意味の伝記、あるいは評伝にならないからである。できるだけ資料に忠実に描くことに徹したいが、そこには評論をまじえた捉え方が出てくるのは当然と思われる。また生きた人間の再創造をめざし、できるだけ残された資料に基づいてその人物に迫ることにしたい。ここでその方法を考えると、社会思想史における把握の方法は、過去の歴史の「思想の再創造」にあると考えている。それも一側面的把握の方法ではなく、思想史の課題は過去の歴史の再創造にあるわけで、政治、経済、法律、哲学、芸術、宗教などの分野を包括したところに生きた人間の活動を把握することにあると考える。そこで生きた人間の再創造をめざし、残された資料に基づいてその実像に迫り、村田四郎の日常的な動向も視野に入れながら彼の信仰の内部までも立ち入って考察することは難しい課題であるが、村田の実像に迫っていききたいと考えるものである。

1. 故郷山口

生い立ち

村田四郎は戸籍によると、1887（明治20）年9月2日山口県山口市の中河原24番地屋敷士族村田祐治、母カメの四男として生まれた。村田の家は萩の下級武士の出身で、「回顧五十年」によれば^⑤、「ある種の理想主義と伝統的な祖国愛に根を置いた精神主義」を叩きこまれた。毎朝父の部屋で兄弟四人揃って四書五経の素読に始まり、大学・論語・孟子・十八史略・日本外史と読み進めていった。時に剣道の稽古をする武家の気風を守り続けた家で育った。周防吉敷には3人の優れた牧師が出た。澤山保羅、成瀬仁蔵、服部章蔵である。村田の父は長州萩の城下、毛利家の下級武士の家系で、萩の明倫館で学んだ。幕末尊王攘夷の熱に浮かせられ奔走したようであるが、その後故郷で「武士の商法」で失敗を繰り返し、1886（明治19）年山口の中河原にささやかな家を持った。6歳になって2年も幼稚園に通わされたのを覚えているという。5歳の時母に死に別れ、母の愛を知らないで育ったので、幼稚園の保母に母を感じていたものと思われると言っている。母の死が自分の一生にとってさまざまな深い問題を投げかけ、母恋しさの思いが教会へと結びつけることになったのではないかと考える時、彼が神の計画の中に置かれていたものだと信じたいと言い、教会は文字通り「母なる教会」であったという。

村田四郎自筆の履歴書によると、彼が明治学院神学部を終えるところまでの履歴は次の通りである。

「一、明治二十七年四月山口町立今道尋常高等小学校尋常科第一学年入学
三十三年同校高等科第二学年ヲ修了ス、一、明治三十三年四月山口県立山口
中学校第一年級に入学、三十八年三月同校ヲ卒業ス、明治三十九年四月東京

芝白金，私立明治学院高等学部第一年級ニ入学，四十四年六月同学院神学部ヲ卒業ス（以下略）」⁽⁶⁾

村田は，山口教会に行くようになったのは中学1年からであると言っている。現在日本基督教団山口教会は山口市中央4丁目にあるが，村田が通った頃の山口教会は中河原にあった。ということは，村田の家は同じ中河原にあったので，教会がすぐ近くにあったのである。彼が，なぜ中学生から行くようになったかについて次のように述べている。

「教会に行くようになったのは中学一年生のころからであるが，中学の外人教師にゴルボルドという伝道熱心なアメリカの青年がいて，青年会や聖書研究会を組織して中学生を指導してくれたが，自分はその愉快的交友の中に漸次信仰に芽ばえていった。明治三十七年七月，中学四年の時に山本牧師によって受洗した。特に深い罪意識によって悔改めに入ったというよりも，キリストへのしたい心と，自らを神にさゝげたいとの祈りが受洗を決意せしめたのであった」。⁽⁷⁾

村田四郎がキリスト教信仰に入る接点がゴルボルド (Gorbold, Reymond Porter) という宣教師であったということを告白しているので，ゴルボルドがどのような宣教師であったかを調べてみたい。ゴルボルドは，1876（明治9）年1月25日アメリカ合衆国インディアナ州に生まれ，オハイオ州のセンタベリー大学を卒業，次いでシンシナチ大学で1年ばかり学んだが，病で休学を余議なくされた。その瀕死の病を得て，その間苦悶し信仰の一大経験をし，キリストの恩寵を感じ献身して牧師をめざした。病氣回復後，シカゴのムーディー・インスティテュートに入学，転じてレエン神学校に学んだ。日本に派遣されることを望んで，米国長老教会伝道局に願い出たが，体格不適格で拒絶された。しかし，

一旦決めたことを諦めることはできず、宣教師としてではなく、山口中学校の英語教師として就任することになった。1902（明治35）年のことであった。1905年には宣教師として適するとの承認を受け、日本駐在宣教師に任ぜられ、その年山口光城女学院の教師パルマー（Palmer, Mary Matthews）と結婚、京都における同教会ミッション事業の主任者として京都や山口地方で伝道をした。⁽⁸⁾

村田はゴルボルドが山口中学で英語の教師をしている時に出会い、青年会や聖書研究会を組織して中学生を指導してくれたと言っている。それは山口教会において青年会を組織し、聖書研究会を通じて交わりをもつ中でゴルボルドとのつながりを深くしていったのではないかと思われる。いずれにしても前述した愉快的な活動を通して次第に信仰に入っていた。山口町後河原には服部章蔵が創立した光城女学校（現梅光学院）があり、その女学生も山口教会に集っていた。1909（明治42）年は開教50年の年で、それを記念して基督教伝道集会の委員が選ばれた。その委員は植村正久、井深梶之助、毛利官治、それにゴルボルドの4人であった。そこで、外山義郎がその巡回伝道師に選ばれ、ゴルボルドと4年間伝道することになった。1910（明治43）年2月9日から5日間本所日本基督教会で伝道集会を開いた。この集会には植村正久、井深梶之助、貴山幸次郎の応援を受け、集会者550余名、志道者34名、洗礼志願者14名、転入会8名を与えられた。その後、この年千葉、青山、東京青年会館、西陣、岡山、広島、山口など17か所、他に釜山、京城、旅順、大連、フェリス、横浜共立女学校などで伝道集会を開き、外山義郎とゴルボルドが一緒に伝道した。⁽⁹⁾

そこで見られたゴルボルドの様子を外山義郎が述べている。伝道旅行中、一日幾度となく祈祷をなし、特に集会の前後には必ず共に祈りをした。その他停車場、汽車、電車、車夫の待合室においても、会う人ごとに小冊子や聖書を与え、簡単なる奨励をして教会に出席するように勧誘

し、集会に際しては開会前その会場の入口に立ち、往来の人々を招くことに努めた。彼は讚美歌を大きな声で指導することに長けていた。その高い音声と無邪気な態度は多くの聴衆を引きつけ、汽車、汽船に乗ると臨席の客に伝道し、トラクトを配布してにこやかに懇談し、教会に来るよう勧めた。彼の家は何時でも来客に満ち溢れ、住所を知れば手紙を書き、京都大学の近くに学生を中心とした会堂を建てた。しかし惜しむべきは、1915（大正4）年12月30日京都にて死去、心臓疾患から来るもので39歳の若さであった。翌年1月2日ゴルボルドと関係深い吉田教会において葬式をしフルトンが説教、大会堂は会葬者で満たされた。⁽¹⁰⁾

前述したように、青年村田はゴルボルドの熱心に語り掛ける話に心が打ち解け、青年会や聖書研究会の輪の中で、愉快的交わりの中で次第に信仰が芽生えて受洗に至ったものと考えられる。

村田が受洗した頃の日本の状況を見ると、朝鮮と満州の支配をめぐって帝国主義戦争が展開され、対ロシアとの戦いに入り、ようやく日露戦争に勝利した。1905（明治38）年9月5日日露講和条約調印、その年の12月には韓国に統監府が置かれた。この勝利によって、資本主義産業が飛躍的に発展、紡績などの軽工業はもとより製鉄、造船・機械生産などの重工業、また電気・ガス・水道業なども発達していった。同時に四大財閥などの産業や金融業も独占力を高めた。

村田四郎が教会に行くようになった時の牧師は、服部章蔵であった。服部は、1890（明治23）年10月から再び第4代牧師として着任し、1905（明治38）年4月に辞任している。服部は、1891（明治24）年光城女学校（現梅光女学院）の設立者で、藩校憲章館で学び、1869年慶応義塾に入塾した後、76年4月6日新栄橋教会にてタムソンから受洗。72年文部省を経て海軍兵学寮英語教官となり、その傍ら夜間の東京一致神学校に通い、78年日本基督一致教会の牧師試補となり、79年4月病妻を伴い故郷山口吉敷で伝道、82年17名の会員を以って山口教会を創立、按手

礼を受け初代牧師となった。村田四郎は、1901（明治34）年中学1年生の時に服部牧師に出会い、翌年着任した山本秀煌の下で教会生活をしたのであった。そして中学4年の時、すなわち1904（明治37）年7月、山口教会において山本から受洗した。1902（明治35）年8月、山本はオーバン神学校の留学から帰国し、同年11月日本基督山口教会に着任して牧会にあたった。同年11月15日、山本、ゴルボルド、ムレーの3人の教職者を招いて歓迎会を開いている。そして、1903（明治36）年5月4日には山本秀煌の就職式が行われた。

山本の山口教会における伝道は好結果を生みだした。すなわち、同年4月以来「日曜礼拝の出席者漸々増加し、目下平均八十名なり。過日ペンテコスト博士来られ、復活、希望、神の賜物等に就きて興味深き説教ありたり」⁽¹¹⁾という状況になり主日礼拝の出席者が増加しはじめた。同年9月の記録には次のような記述がある。

「暑中は僅々四十二三名の聴衆あるに過ぎざりしが、諸学校の開校と同時に来会者の数を増し、目下日曜礼拝に九十名乃至百名、祈禱会に平均三十名位出席し居れり、教会は山本氏の尽力に依りて益々盛況に向ひ、現時七名の洗礼の洗礼志願者十数名の求道者を見るに至りぬ」⁽¹²⁾

1904（明治37）年2月山口教会では植村正久を招いて特別伝道を行ない、青年や学生に向けて活発な伝道を展開した。植村の来山は特別伝道が目的ではあるが、日本基督教会の中心人物同士が伝道上のことについて懇談できることは、山本にとってこれからの山口教会の伝道を考える貴重な時となった。当時山口市内には、カトリック教会、メソジスト教会、日本基督教会の三つの教会があったが、前任牧師の服部章蔵時代には見られなかった教勢の上昇を見た。市内の山口中学校、山口高等学校への生徒や学生への関わりを持つために特別伝道を展開し、聖書研究会

を行なって、ゴルボルドと連携しながら青年層を教会へと導く試みがなされた。村田はそのような中であって、植村正久を呼んでの特別伝道礼拝に出席して植村の説教を聞いた一人であった。⁽¹³⁾

そのような状況下であって、村田は受洗を契機に伝道者の道を志すようになった。彼が主の求めに応じて献身し伝道者の道に進むべく神学校に入学した。しかし、ここに至るまでには多くの困難が伴っていた。彼は山口中学校を1905（明治38）年に卒業しているが、卒業と同時に明治学院神学部予科に入学したのではなく、翌年神学部に入學しているで、その間1年の空白がある。ということは、明治学院神学部へ進むことについて簡単に決まらなかったことを表している。村田はその頃のことを次のように語っている。

「そのころから自分の生涯の使命の問題が重くのしかかって来た。ころは日露戦争時であった。父はもちろん軍人である事を希望したが、自分はその事に疑問をもちはじめ、伝道者として支那大陸にゆきたいとの幻をもつようになった。父の反対は頑強であった。三十八年中学を卒業した時、父と子の間には重く苦しい対立が生じたので、山本牧師や教友の石橋智信氏（後の東大教授）その他の教会員らが父の説得のため骨折られ、ついに父は根負けして自分の願いを許し明治学院神学部予科に入る事となった。」⁽¹⁴⁾

村田青年は、彼のなかには伝道者の道に進むことができるかという不安があったと思うが、一方で父は当然のごとく軍人になることが自明の理であると考えていた。ここにおいて、自分の使命と父の希望する軍人との間の問題に悩み始め、父と対立し重たい空気が家庭に漂い始め、その間彼がどう考え行動したかは具体的にみることはできない。しかし、村田には、のちに東京大学の教授になった石橋智信が心配し良き相談相手となって支えてくれた親友がいた。この時、山本秀煌が村田家に何度

も出かけて父親と話をし説得した。そこで語ったことは、「伝道者もこの世に福音を伝えるために命がけで戦う軍人のようなものである」というような意味のことを父祐治に伝えて説得、終に父親は折れて息子の願いを聞き入れて、明治学院神学部予科に入学することができた。

2. 明治学院神学部時代

明治学院神学部予科

村田は、1906（明治39）年4月明治学院高等学部第一年級に入学、いわゆる明治学院神学部の予科を経て、1911（明治44）年に卒業した。

明治学院神学部の規則が1902（明治35）年に改正され、学力の程度を引き上げている。中学卒業程度の学力がある者は、まず高等学部2年間の課程を終えた後、神学部に入ることになり、高等学部は凡そ高等学校程度で主な学科は英語、倫理、心理、哲学、経済、天文地質、歴史等を学ぶことになっていた。従って村田は、1908（明治41）年に神学部課程に入った。翌年1月山口教会の牧師であった山本秀煌が神学部の教授として着任した。⁽¹⁵⁾

山本が就任した頃の神学部は、教授の交代期にあった。1903年11月植村正久が辞任、続いてフルトン教授が辞任した。植村がW.N.クラーク著『基督教神学概論』をテキストに使用していたことに対し、保守的神学を主張するフルトン教授がこの書の神学は自由主義的傾向が強いと非難した。植村は1901（明治34）年海老名弾正と福音主義論争を通して福音主義の旗印を明確にし、日本基督教会の指導者としての地位を不動なものにした。彼は、フルトンの批判を契機に教会の独立と神学教育の独立を考えて、明治学院神学部を退職、東京神学社を創立、柏井園は教頭として加わり、神学生日高善一、井口弥寿男らが退学して植村の陣営に走った。一方フルトンは、1907（明治40）年6月1日を以って明治学

院神学部を去り、同年9月神戸神学校を創立、明治学院予科にいた賀川豊彦、富田満、飯島誠太などが神戸神学校に転校、明治学院神学部は危機的な状況に陥った。⁽¹⁶⁾

その後、1909（明治42）年当時の神学部の陣容を見ると、教授の補充がなされた。明治学院総理で神学博士の井深梶之助は説教学と基督教倫理を教え、書記の松永文雄は基督伝、教会歴史、教理史を担当。神学博士のウィリアム・インブリーは、系統神学、新約聖書神学、旧約釈義緒論、旧約神学、秦庄吉はギリシャ語、系統神学、新約緒論、山本秀煌は牧会学、教会政治、説教学を教えている。講師では、牧師有馬純情が弁証学、A.R. ミラーは新約釈義、牧師田島進は旧約歴史、旧約緒論、T.M. マクネイアは讃美歌音楽を担当している。⁽¹⁷⁾

このような神学部の陣容の中で村田は学びを深めたが、その当時の学院の雰囲気はどうだったのだろうか。村田が明治学院の6年間の学院生活を過ごしたキャンパスを行き交う様子が、島崎藤村の『櫻の實の熟する時』にある。⁽¹⁸⁾ 村田は、「回顧五十年」において彼自身が捉えた学院生活の追憶に触れているので引用したい。

「明治学院の美しいチャペル、緑の濃い芝生や樹木、高層な学生寮、ペンキぬりの外人教師の住宅など外国にいったような思いがした。高等学部生の寮をハリス館と言って、その内部の畳数、障子にはあちこち筆太に落書がしてあった。自由な空気、清潔な基督教的敬虔、学問に対するあこがれ、といったようなものがたちこめておる場所であった。現在もあの若き時代の明治学院生活を回想すると、自分のうちに青春のロマンチズムがいびきしてわがアルマ・マテルの思いがなつかしく湧くのをおぼえるのである。」⁽¹⁹⁾

神学部での学び

明治学院神学部にはインブリー博士という優れた神学者がいた。かつ

て、山本秀煌がオーバン神学校に留学する時、何人かの人に相談した。帰米したヘボンに山本が相談したことが、1900（明治33）年10月19日付けのヘボンの書簡に見られる。ヘボンが二つの神学校に問い合わせ、また外国ミッション委員会の何人かに相談して山本に返事を出している。ヘボンが得た結論は、アメリカに来て学ぶことは有益ではない。大学院課程を受講するために要求されるものは高度なものであり、それに個人の情状による例外はない。それに加えて旅費や寄宿費用その他の費用は大変高額である。アメリカで得ることのできる全ての神学の教えを明治学院で得ることができると山本に述べた手紙がある。その返事の手紙は次の通りである。

「アメリカで得ることのできるすべての神学の教えを、明治学院において得ることができると、わたしは確信しています。インブリー博士以上の教師や教授は、わが国の神学校にはおりません。一年間、指路教会の責任から離れ、日本中を旅し、いろいろな教会で福音を述べ伝えたり、聖書やキリスト教冊子を配ったり、同じ主題について講義することはいかがですか」⁽²⁰⁾

ここにいうインブリーは一流の神学者で、村田はこの人の聖書釈義は優れたもので、実に興味豊かな講義であったと言っている。またA.K.ライシャワーは青年教授であったが、鋭い人で将来を期待された学者であった。井深梶之助の説教指導とブラウニングの詩の講読はすばらしいものがあった。しかし、先生と接触する機会は殆どなく、信仰上の指導は学生が出席している教会に任せるような状態であった。

「そのころ明治学院での神学的空気というようなものはリッチェル系統のものと、もう一つは固いファンダメンタルリズムに近い保守的なものであった。これでは時代の疾風怒涛にたち向うには弱々しく不十分なものであった。と

ころが従来のアメリカ風の神学に不満を感じたわれわれ学生らがドイツの神学に注意をむけ始めたのであるが、そこから来るものはハルナックであり、フライデラーであり、ヘルマンであって、これら十九世紀のドイツ自由神学に戦いをいどまれつゝ、保守派の陣営は正統信仰を守るのに苦心の多かった時代であった。そうした中に植村先生とその弟子らが自由主義神学を無視せず、しかもそれに押し流されないで信仰の真理をしっかりとふまえて立っている姿は偉観であった。幾度か富士見町の講壇から信仰の根本問題に教えをうけた日の事を思わざるを得ない。

明治学院というさゝやかなクリスチャン・スクールで、どこかロマンティックな、どこか清教徒的な、カルビニズムと異教主義との混ざりあったような場所で若き日の六年をおくった事は、自分の生涯に徹底的な影響をあたえた。そこであたえられた問題と反抗と精進と志とは、自分の信仰に如何にかして徹したい、徹して福音の恩寵を宣べ伝えるものとして聖別せられたい、との祈りをたえずもちつゞけしめられ、またこの疑惑の中に動揺している時代に、信仰の根本問題を神学的に把握し整理したいとの念願のもとに勉強をつゞけていった。そして生涯神学的学修をする事のよろこびをもたらしめられたのである。」⁽²¹⁾

神学部では毎月一回最上級生が自分の研究を発表する研究会があった。村田は、そこで「パウロ神学における義認の問題」を取り上げた。その頃すでに歴史的イエスとパウロの宗教とのさけめが、ドイツの神学界において大きな問題となり、英米においても『イエスカパウロか』と新約神学の根本問題が論ぜられ、刺激をうけたという。そこでパウロの信仰をつきつめて研究してみたいとの考えが沸いてきてこのようなテーマを選んだ。明治44年神学部を卒業して東京中会で教師試験をうけた時の論文テーマは『パウロの基督論』であった。

では、神学部で学ぶ学生側の動向はどうだったのだろうか。神学部

おける村田四郎の同期は6人であった。藤本保巳、大井上武、大迫元繁、瀬川四郎、馬場久成がいた。当時の明治学院には、その後日本のキリスト教史において忘れることができない人物が学んでいた。そのころの神学部については、村田自身が語っている追憶を見てみよう。

「自分の一級上に賀川豊彦、中山昌樹、加藤一夫らの諸君がおり、一級下に渡辺善太、郷司槌彌らがいたが、別科の上級生として沖野岩三郎、児玉充次郎、富田満ら、本科の最上級生として都留仙次がいた。折々都留君が数冊の分あつい洋書をかかえて図書館から出て来る姿をみて、自分も早く原書をよみこなせる能力をもちたいものだ、どのように熱望した事か。ハリス館の自室のとなりに賀川君の室があったが、彼は朝早く起きて音読をやるくせがあり、彼の書架には学生の財力をこえる新刊の洋書がいくつかならんでいた。その猛勉強ぶりはすごいと思わせた。賀川と中山とは親友といってよい間柄で、真面目な議論をたゝかわしている事もあれば、ふざけあって二階から一緒におちた事もあったほど遠慮のない交わりをもっていたが、後にダンテを訳し、カルビンを訳した中山の勉強ぶりはすでにそのころからあらわれていたようだ。(中略) 渡辺善太は今でこそ堂々たる日本の神学者であるが、明治学院に入って来たころの彼の顔つきまで固く特色づけられ、いかにもホリネスらしく、よくもこんな自由な所に来たものだと思わせたが、独協を出て来た彼はドイツ語は群を抜いていた」。(22)

賀川豊彦と中山昌樹がハリス館の二階からふざけあって一緒に落ちたが、もしハリス館の傍らに背の低い杉の木がなかったならば、今頃どちらかはこの地上にいなかっただろうと言われている。村田にとって、学友らと明治学院近くの大崎や五反田あたり森や草深い場所で祈ったり、あるいは真剣に議論し合い、時には麻布十番で路傍伝道をしたりした思い出は一生涯忘れることのできない交わりであった。

明治学院文学会

明治学院では、学生の集いの一つに明治学院文学会がある。毎週一回開催される演説会は白金健児の意気と雄弁を見ることができ、教室では学べないものであった。村田四郎より一級下で普通学部 にいた郷司慥爾が「私の学院時代」の題で、「文学会」の事について触れている。

「当時神学部にはまた随分変わったのが居た。「高帽子」「鬼」「雷」と綽名のついたのが居て別世界の人のやうに思はれた。高等学部の賀川君などは文学会で「カントが」「シェリングが」など、干高い声で言って少年達を驚かした。三谷隆正、吉田信乃公などは英語演説や英詩朗読をやり、井深の健ちゃんは「諸君！僕達は」と歯切れのよい声で演説した」⁽²³⁾

ここに登場した吉田信乃は明治学院の名物男と言われた。彼は、1909（明治42）年9月13日若くして永眠した。冒険好きの吉田は越中島の練習船雲鷹丸に便乗して近海漁労に出かけた。彼は胸の病を癒すつもりで乗船したが、過激な労働は病気を悪化させ、仙台の病院で療養したが22歳にして逝ってしまった。同年11月1日、故人を慕う学生たちが明治学院のサンダム館において追悼会を開いた。⁽²⁴⁾ 聖書朗読祈祷村田四郎、開会の辞馬場久成で始まり、演説に立ったのは、藤本保巳、村田四郎、八太船三、瀬川四郎、三谷隆三、石本貫一、尾崎安二郎、関川重義、宮尾先生、熊野雄七幹事の10人であった。その後、遺稿朗読、最後の巖父松林伯知の挨拶があった。吉田信乃は、1897（明治30）年熊野雄七の家に託せられ、当時知名の講談師松林伯知の子となった。伯知は実子の思いを傾けて育てた。熊野も我が子同然に可愛がって、岡見清致の頌栄小学校へ通わせ、明治学院普通学部へ入学、ヘボン館に移り住んだ。吉田は頭脳明晰、竹を割ったような気質で嫌味のない生粋の江戸っ子肌の男であった。それでいて真善美に對す憧れには深いものがあつた。明

治学院創立期のキリスト教信仰からあふれ出て来た師弟愛を感じながら、一人一人の学生を大切に労う雰囲気の中で育てられたのが吉田信乃だった。そうした学生を失ったことは、学院にとって大きな損失であったが、それよりまして彼とつながっていた友だちにとっては、言い表すことのできない寂しさと喪失感をもたらしたのであった。

1909 (明治42) 年発行の『白金学報17号』に村田が「聖徒を憶ふ」と題し文章を載せている。「実に今の時代は建国の歴史有って以来まれに見る所の者として、大いなる過度の時代甚だしき同様の時代なり」と叙述している。これは例えば、フロックコートに陣笠、羽織袴にシルクハットをかぶるような時代で、青年の思想は動揺し、苦悶し解決しようとしても見出すことができず、あたかも「神経衰弱に落ち入りつゝある」という状況になったという。われらは多くの聖者を知っている。ルター、アキノナス、アシジのフランシス、聖パウロを見るに、近代人の生活よりも甚だしく異なる生活を営み、彼等の生活は花々しき生活ではないが、しかし永遠の真理の上に立てられた生活をしている。村田は最後に次のように言う。

「吾人は此処に於てか猶憶ふ事切なり。彼聖徒の權威と確信の生活や！吾人をして神によらしめよ、而して確信の生活に入らしめよ、此の苦悶の時代不信の時にあたりて谷の百合の如く美はしくしてしかも巖の如く強き信念の生活と充実せる聖徒を追憶して、可懐しさと慕はしさに胸せまるようおほゆる也」⁽²⁵⁾

同じ紙面で島崎藤村のことが記されている。藤村が『春』を出版、明治学院時代の在りし日に明治、青山、立教の諸学院連合の文学界において、文学会がいかに楽しいものであるか明治学院を代表して快弁を振るった。⁽²⁶⁾『櫻の實の熟する時』は、彼が学んだ明治学院時代のキャン

パスの雰囲気伝える小説となっている。

社会主義とキリスト教

村田四郎は、日露戦争後青年の心を揺さぶった大きな問題には社会主義運動があったと語っている。国内的には、明治30年代になると産業の発達に伴って労働環境の改善を求めて労働組合期成会が結成され、社会運動が高まっていった。それに対し政府は、1900（明治33）年治安警察法を制定し社会主義運動の規制に乗り出した。1900年から翌年にかけて資本主義恐慌が起こり、1907年には造船所、軍工廠、炭鉱、鉱山に大争議が起こった。同年2月に足尾銅山の鉱毒問題から争議が起こると、軍隊三個中隊を出動させて鎮圧するに至った。また日露戦争を契機に地主に対する税金を高めると、さらに寄生地主制が進んで、1910（明治43）年前後になると、全国水田の50%以上が小作地となり貧富の格差が広がった。

そのような中で、日本で本格的な社会主義運動がはじまり、社会主義の立場から資本家階級に対抗し労働者の生活を擁護する運動が起こった。1898（明治31）年10月安部磯雄、村井知至、岸本能武太、豊崎善之助らを中心としたユニテリアン派のキリスト教徒が集い、社会主義研究会が結成され、幸徳秋水、片山潜も参加した。1900年には社会主義協会を設立、1901年5月20日安部磯雄、片山潜、幸徳秋水、西川光二郎らが社会主義政党である「社会民主党」を結成し、社会民主党宣言を発表した。彼らは、軍備全廃、一般人民投票制、貴族院の廃止などを掲げた。しかし、この社会主義運動も引き続き活動することが許されなくなっていった。1900年10月に組閣した第4次伊藤内閣はこれを禁止した。またキリスト教社会主義者の安部磯雄らが結成した「社会主義協会」も1901年6月第一次桂内閣の時解散させられている。⁽²⁷⁾

日本の資本主義が戦争を契機に進展し、労働運動が起こるにつれて社

会主義に注意が呼び起こされていったと村田は告白している。明治学院では、学生討論で非戦論が戦わされ、社会主義に促されたと言っている。その時の村田が関心をもっていた状況を彼の「回顧五十年」から引用したい。

「賀川豊彦は早くからマルクスの資本論を紹介したり、経済史観の何ものであるかを解いていたが、自分が予科二年の時、野々村戒三教授の歴史の試験論文に「ルターの宗教改革における経済的背景」と題する一文を提出した事を覚えておる。そうした方面に注意が向いていたためであろう。よく学友らと徒歩で神田の青年会館や神田教会に社会主義の演説をき、にいった。片山潜、幸徳秋水、木下尚江、安部磯雄らの演説に新社会のあり方などまほろしに描いたのであるが、その後、基督教社会主義とマルクス派社会主義とが分れ争うようになって、日本における初期社会主義運動は一段落ついた形となり、やがて来る吉野作造のデモクラシー運動やマルキシズム運動へと発展してゆくのだが、福音宣教と社会運動とは大きな課題となって自分の胸にいつまでものこった」⁽²⁸⁾

その後の社会主義運動は、政府によって息の根を止められた。その典型的な社会主義運動の弾圧事件として、挙げなければならないのは「大逆事件」である。それは無政府主義者菅野スガや宮下太吉らが天皇を圧政の元凶として暗殺することを考え始めたことが発端であった。彼らが天皇暗殺を話し合っていた段階で、政府がその計画を察知し、1910年5月から6月にかけて宮下や菅野を捕らえ、幸徳秋水をはじめ社会主義者、無政府主義者の指導者を一斉に逮捕したのであった。幸徳秋水はこの計画に関与していなかったが、幸徳を首謀者とし天皇暗殺を計画したことをでっち上げ、24名に死刑を宣告した。逮捕から死刑執行まで半年というスピードで葬り去った暗黒的な裁判であった。1911年1月24

日、幸徳ら12名の死刑を執行し、残りの12名は無期懲役に改められた。

この事件によって社会主義・無政府主義に対する恐怖心を国民に抱かせ、日本人のなかに社会主義は極悪非道な危険なものというイメージを植え付けるに至った。その上、これを契機に社会主義や労働運動を弾圧することを専門とする特別高等警察（特高）が警視庁に設けられた。村田は、社会主義とキリスト教が結びついて新しい社会を志向することに好感をもっていたところがあった。1910（明治43）年賀川豊彦は神戸葺合新川の貧民窟に居住し、伝道と隣保事業に従事、救済運動を展開した。⁽²⁹⁾ 村田は、賀川のような生き方を取るべきか、しばしば考えさせられたが、召命感を以って神学部に入ったことを考えると、伝道界で生きることが自分の使命であると考えようになった。彼自身の言葉を借りれば、「伝道者としてゆく道より他に汝の使命はない、との御声をどこか深いところできいていたからであろう」と、告白しているところを見ることができる。

神学部卒業

1908（明治41）年12月、山本秀煌が明治学院神学部教授に就任、一方村田は1911（明治44）年6月3日に卒業しているので、約3年近く山本から村田は教えを受け、同じキャンパスで生活していた。1909（明治42）年夏、神学部の学生及び予科生による夏期伝道が例年のように行われた。夏期伝道に赴いたのは15名であった。村田四郎は北海道小樽日本基督教会に派遣されて夏期伝道を行なった。村田は予科の2年生の時、夏期伝道に派遣されたが、その行先は不明である。⁽³⁰⁾

賀川豊彦によれば、村田は大食倶楽部の会長をして何時もにこにこしていたという。山本が着任した頃の明治学院は、普通学部、高等学部及び神学部が併設されていた。1908（明治41）年3月の理事会記録では、在学生が普通学部312名、高等学部19名、神学部31名であった。その

うち三分の一が信者であった。毎朝10時から礼拝が行われた。

明治期の明治学院規則によると、学期の規定は、毎年9月20日に始まり、翌年の6月第1週で終わる。学年を2学期制とし、第1学期は9月20日より12月24日まで、第2学期は1月8日より6月第1週で終わることになっていた。1911(明治44)年の卒業式は、6月3日の午後3時より第26回明治学院神学部卒業証書授与式が挙行された。神学部の本科は6名、別科7名だった。井深梶之助が13名の卒業生に卒業証書を授与した。九州長崎で伝道していた瀬川浅の息子瀬川四郎が卒業生を代表して「贖罪論に於ける近代的傾向」と題する論文を朗読、村田は卒業生を代表して答辞を述べ、そのあと宣教師コオツが「現代における基督教会の使命」と題して演説があった。本科の卒業生は、村田四郎(出身地山口)をはじめ、大井上武(東京)、大迫元繁(宮崎)、瀬川四郎(長崎)、藤本保巳(熊本)、馬場久成(埼玉)であった。⁽³¹⁾ この6人の卒業後の任地は次のようであった。本科卒業の村田四郎は桐生教会、大迫元繁は満州に赴き、藤本保巳は室蘭教会、馬場は高輪教会、大井上と瀬川は徴兵の関係から未定であった。1911年7月12日、村田四郎は桐生教会に就任し、その時東京中会を代表して千屋和と山本秀煌が駆けつけた。若い村田が、絹織物の町桐生で伝道者としてやっていけるかどうか心配もなくはなかったが、山本たちは伝道者のスタートラインに着いた村田の姿をみたのであった。

村田が卒業した年の9月21日午前5時のこと、明治学院にとって忘れられない出来事があった。宣教師ヘボンがニュージャージー州イーストオレンジの自宅で静かに息を引き取った。96歳であった。このヘボンの死を前後して、日本のキリスト教史の上で忘れてはならない人物が多く死去している。日本最初の女学校を設立したM.E.キダーが1910年6月25日に亡くなり、同じ年の12月2日日本最初の日本人牧師奥野昌綱が逝去した。また1911年1月27日、明治学院の宣教師ワイコフが、

1912年2月16日にはヘンリー・スタウトが、3月26日には本多庸一が息を引き取り、4月25日にはジョージ・ノックスがその生涯を終えている。

ヘボンが息を引き取った9月21日朝方、村田四郎が住み慣れた明治学院のヘボン館が炎上、鎮火したのは午前7時頃であった。神学部の実務員東瀬の子どもが日頃の朝起きのまま運動場に出ると、運動場の北側に聳え立つヘボン館の中央部の階下から物凄い炎が見えた。父のもとに駆け付け、同館の入り口の校鐘を乱打した。構内に住んでいる井深総理、熊野幹事も駆けつけ、生徒の鈴木迪彦が二本榎の第二消防署に走って急を報じた。消防夫が来て消火栓を抜いて防火に努めたが、4階建ての建物に水が届かなかった。というのは各戸が水道を使用していたため使用量が多く、折角のポンプも給する水がなく、噴出5、6尺に過ぎなかったため施しようがなかった。隣の新築されたハリス館に火が燃え移るかに見えたが、東西に吹いていた風が西南に変わり、益田邸にあった池と小川の水を利用して新校舎に移らないように防御し、ハリス館は助かった。⁽³²⁾

ヘボン館の焼け跡の余熱が冷めやらぬうちに、米国駐在大使内田康哉から外務省に「ヘボン博士、九月二日朝死去せり」との電報が届いた。時差はあるものの、ヘボンの死とヘボン館炎上が同じ日に起こったことは、明治学院に学ぶ者にとって忘れることができない不思議な出来事となった。⁽³³⁾ これを聞いた村田が、学生時代に住みなれた思い出深いヘボン館の焼失をどのように感じたかは知るよしもない。

終わりに

村田の前半生を描いた。十分描き切ったとは言えない。村田は明治学院神学部で学んだ。神学部で学んだことが彼の人生を決定的にしたので

あった。明治学院神学部に入學し、「どこかロマンティックな、どこか清教徒的な、カルビニズムと異教主義との混ざり合ったような場所」で、若き日を送ったことは村田の生涯に決定的な影響を与えた。彼は日露戦争の頃、盛んに日本社会の若者に影響を与えた社会主義運動に心を揺すぶられ、非戦論や社会主義の講演会や討論会に出かけた。福音宣教に生きるか社会運動の道に生きるかの葛藤があった。彼は、結局当初決心した伝道者の道が自らの使命として決断したのであった。

神学部卒業後のことは他日を期すが、もし村田が村田たる所以を発揮したことは何かと問われれば、筆者は説教をしている時が彼の本領が遺憾なく発揮されている時と考える。彼は、戦後明治学院が大学として成長する時の学長をし、院長をも経験した。同時に一ツ橋大学の学生を中心に開拓伝道をして若い教会を育てようと試みた。しかし、彼は、日本基督教団に残るか、日本基督教会に離脱するかで分裂した横浜指路教会に関係し、終に開拓伝道から発展して成長しようとする国立教会を離れて、1874年に創立された横浜指路教会が日本基督教団に残った教会を復活させるためにこの教会の専任牧師となった。彼の説教は、日本基督教会の伝統の中で生きたので、その伝統を受け継いだ説教となっている。現在の東京神学大学の前身の日本神学校の校長で伝道者を育て、また明治学院専門学校を大学へと発展させるなかで、学生たちに分かりやすい心に残る説教をした。その説教は主題説教であった。村田の説教は、キリスト教の「キ」の字も分からない初心者でも理解できるような説教をめざした。完全原稿は作らず、ノートにいくつかの事柄を記したものを書き、囁んで含めるような語り口で説教した。聖書の御言葉を中心としながら、社会や政治、文学などあらゆる問題に触れながら説教し聴衆と対話するような説教形態をとったことを記しておきたい。

注

- (1) 村田四郎「回顧五十年」『原始キリスト教研究』創文社、1962年
この書は、村田四郎牧会50年を記念して出版されたもので、第一部歴史、第二部神学の論文を掲載、第三部は人と事業と題し村田の人となり、回顧五十年の自伝、年譜が掲載されている。村田は、明治学院神学部教授、日本神学校の校長を経験、神学者であると同時に、明治学院大学の学長、院長を経験した教育者であり、無牧の教会を助け、最後は横浜指路教会の牧師として活躍した人物である。
- (2) 加山久夫氏「ウルからカナンへ 村田四郎―神学者・教育者・牧師として」―『明治学院人物列伝―近代日本のもうひとつの道』新教出版社、1998年
- (3) 加藤常昭「解説」『村田四郎 日本の説教Ⅱ』日本キリスト教団出版局、2007年。この書は、村田の代表的な説教を集めて掲載し、村田の説教を中心として解説をしている。
- (4) 「牧会者のポートレート―村田四郎―」『説教黙想』、日本キリスト教団出版局、2011年
- (5) 村田四郎「回顧五十年」『原始キリスト教研究』、344頁
- (6) 村田四郎自筆の履歴書。この履歴書は、出生から始まって、大正5年9月大坂同志神学館教授就職、同6年6月大坂南日本基督教会牧師に就職、7年3月辞職までが書かれたものである。明治学院歴史資料館所蔵
- (7) 村田四郎「回顧五十年」『原始キリスト教研究』、345頁
- (8) 『福音新報』1711号、大正5年1月7日
- (9) 同上、1712号、大正5年1月3日
- (10) 同上、1711号、大正5年1月7日
- (11) 同上、412号、明治36年5月21日
- (12) 同上、431号、明治36年10月1日
- (13) 拙稿『山本秀煌その時代―伝道者から教会史家』教文館、2012年、138－139頁
- (14) 村田四郎「回顧五十年」『原始キリスト教研究』、345頁
- (15) 明治学院同窓会「明治学院神学部」『白金学報十七号』、明治42年、4－5頁
- (16) 拙稿『山本秀煌その時代―伝道者から教会史家』教文館、2012年、166－168頁

- (17) 明治学院同窓会「明治学院神学部」『白金学報十八号』, 明治42年, 10頁
- (18) 島崎藤村『櫻の實の熟する時』新潮社, 1967年, 13頁。当時の明治学院のキャンパスの様子を島崎がこの書の中で次のように伝えている。「英語の讚美歌を歌いながら庭を急ぐものがある。張り裂けるような大きな声を出して叫ぶ者がある。向うの講堂の前から敷地つゞきの庭へかけて三棟並んだ西洋館はいずれも捨吉が教を受ける亜米利加人の教授達の住居だ。白いスカートを涼しい風に吹かせながら庭を歩いて居る先生方の奥さんも見える」。
- (19) 村田四郎「回顧五十年」『原始キリスト教研究』, 345 - 346頁
- (20) 岡部一興編, 高谷道男・有地良子訳『ヘボン在日書簡全集』2009年, 教文館, 477頁。ちなみに、インブリーは日本基督教会において種々の貢献を見ることができる。主なものでは、1877年日本基督一致教会の創立のまとめ役, 1890年の信仰告白における貢献, 1899 (明治32) 年における文部省訓令12号が發布された時代, キリスト教を教えるならば徴兵猶予と上級学校への門を閉ざすとされた時, キリスト教主義学校が強く抵抗し, 信教の自由の視点から上記のことを撤廃させたリーダーとして活躍した。
- (21) 村田四郎「回顧五十年」『原始キリスト教研究』, 349頁
- (22) 同上, 346頁
- (23) 鷺山第三郎著『明治学院五十年史』, 明治学院, 昭和2年, 351頁
- (24) 同上, 356 - 358頁
- (25) 『白金学報第17号』明治42年, 13頁
- (26) 同上, 4頁
- (27) 井上清『日本の歴史 下』岩波新書1974年, 96 - 99頁
- (28) 村田四郎「回顧五十年」『原始キリスト教研究』, 348頁
- (29) 隅谷三喜男『賀川豊彦』岩波書店, 2011年, 29 - 43頁
- (30) 明治学院同窓会『白金学報第十八号』明治42年, 60頁
- (31) 明治学院同窓会『白金学報第二十四号』明治44年, 30頁
- (32) 鷺山第三郎『明治学院五十年史』374 - 375頁
- (33) W.E.グリフィス著, 高谷道男監修, 佐々木見訳『ヘボン——同時代人の見た』教文館, 1991年, 237 - 238頁

(つづく)